

ユダヤ教の人間観—マイノリティに関するテキストの データベース化と現代社会への提言

Judaism's view of humankind: creation of a
textual database on minorities and
suggestions for modern society



勝又 直也 (KATSUMATA NAOYA)

京都大学・大学院人間・環境学研究所・准教授

研究の概要

本研究は、ユダヤ教とマイノリティというテーマに関して、ヘブライ語、アラム語、ユダヤ・アラビア語、イディッシュ語などで書かれたあらゆる関連資料を収集、精読、翻訳、データベース化し、実証的な分析を行うことにより、マイノリティ観の根底にあるユダヤ教の人間観の本質を理解するものである。

研究分野：ユダヤ学

科研費の分科・細目：哲学・宗教学

キーワード：ユダヤ教、ヘブライ文学、マイノリティ

1. 研究開始当初の背景

国内においてはユダヤ学研究自体がいまだ発展途上の段階にある。海外では、イスラエルや欧米諸国を中心に極めてレベルの高いユダヤ研究が盛んに行われているが、本研究のような、マイノリティをキーワードとしたユダヤ教の人間観に関する大規模な実証的総合研究は、海外においても本格的には行われていない。

2. 研究の目的

本研究は、「ユダヤ教における人間観」に関して大きな規模で、総合的かつ網羅的なデータ収集および客観的な分析を行うことにより、人間疎外に特徴付けられる現代社会に対して、人間性の回復のための明確な提言を行うことを目的とする。

3. 研究の方法

ユダヤ教における人間観が端的にあらわれていると思われる存在である「マイノリティ」、「他者」、「傷を持つ者」などに関して、あらゆる言説（時代、地域、言語を問わず）を収集し、日本語および英語に翻訳してデータベース化する。これらの言説は、ユダヤ教における人間観を理解するうえでの重要な言説（「なぜ人は自分と他者を区別するのか」など）として理解される。

4. これまでの成果

本研究の第一の学術的な成果は、本プロジェクトで開発したデータ入力閲覧フォームを通して、日本ではまだ紹介が始まったばかりのユダヤ教文献を、ヘブライ語原典・英語・日本語の三言語で同時閲覧できる点である。右から左書きするヘブライ語と、左から右書きする英語、日本語を同時に入力するシステムを構築しなければならない。加えてこの三言語で検索語を設定し、それを検索するための入力システムの構築は、画期的なことである。邦訳を通して、全体的な理解を容易にし、かつヘブライ語・アラム語原典を比較参照し、原典に即した理解が可能であるし、同時に英訳を備えることで、国際的に通用するフォームを呈している。

このデータベース・フォーマットで入力を進めていくために、主要なラビ文献の章・節を計上し、入力のための枠組みを作った。計上は膨大な作業であったが、ミシュナ、トセフタ、バビロニア・タルムード、エルサレム・タルムードなど主要なラビユダヤ教文献の計上が進んでいる。この章・節の枠組みを構築したことによって、本プロジェクトの主題だけではなく、広く様々なデータ集積・分析に利用可能なユダヤ教文献の本格的なデータベースのひな型ができたことは、高く評価されよう。

また第二の成果は、本データベース構築作業を通して、ユダヤ教における人間への関心の強さが様々な形で明らかになったことである。本プロジェクトにおいては、人間観、マイノリティ観を検索するタグとして何を設定するかが、絶えず問題となった。それを広義で設定するか、狭義で設定するかが論議の的となった。最初にスタートしたヘブライ語聖書では、広義で検索語を収集する方針であった。その結果、膨大な検索語がヒットすることになった。この事実自体が、ユダヤ教の核となるヘブライ語聖書が、いかに人間中心に記述されているかを表すこととなった。宗教とは、人と神があって成立するのであるから、人間が中心にあるのは当然であり、こうした指摘は評価されないことも多い。しかし、これまで、各宗教の人間観を網羅する統合的な研究は存在していないので、宗教だから人間中心であるという前提も、科学的に立証されているわけではない。事実、多神教世界の文献では、神々の相関関係もまた重要なテーマであるのに対して、一神教の祖とされるユダヤ教文献では、こうしたテーマはあまり見られず（異教との対抗は、異教徒との対抗として人間の次元に落とされる）、その分、人間に関する記述が増えてくる。少なくともこれまでの本プロジェクトで収集されたデータの分析によれば、ヘブライ語聖書では、人間観に関わる用語の中でも、民族・社会に関わる用語が多いのに対して、ヒンズー教の聖典であるリヴ・ベータでは、親族・行為に関わる用語が多いという考察を予備的に行った。宗教だから人間に関心があるという従来の前提を、もっと細かく検証することによって、それぞれの宗教での関心点の違いから価値観の違いを明らかにすることになり、それぞれの宗教への深い理解がもたらされるであろう。

さらに、本研究の第三の学術的成果として、研究代表者がユダヤ教の人間観に深く関連する重要な研究成果を、国際社会の舞台で極めて意欲的に発表してきたことが挙げられる。ユダヤ教の人間観というテーマを中心として、ユダヤ学のさまざまな領域において、世界に向けて研究成果を発信し続けてきた研究代表者は、世界の第一線で活躍する日本人若手研究者として、国際的な研究者仲間から十分に認知されるようになった。これまで、平成20年度から平成22年度までの3年間に与えられた本研究費の成果は、この第三の点において最も目に見える形で表れていると言えよう。

5. 今後の計画

今後は、データベースのフォーマットの使いやすさを改良するなど技術的な問題点をクリアする。また、データベースの検索語を、重要で明白なマイノリティ用語のみに限定しながら、それらの検索語について、できるだけ多数の文献からデータを厩大化させることで、よりコンパクトであるがより実際的なデータベースを目指す。さらに、当初の計画にはなかった近現代ユダヤ文学からのデータ入力も精力的に進める予定である。古代や中世のみならず近現代のユダヤ文学作品での人間観、マイノリティ観を付け加えることが、包括的なユダヤ教研究として望まれるところであると判断されたからである。

6. これまでの発表論文等（受賞等も含む）

【著書、論文】

Wout van Bekkum and Naoya Katsumata (eds.), *Giving a Diamond: Essays in Honor of Joseph Yahalom on the Occasion of His Seventieth Birthday* (Études sur le Judaïsme Médiéval 49), Leiden and Boston: Brill Academic Publishers, 2011, vi + 328 pp.

Naoya Katsumata, “The Style of the Arabic, Persian, Hebrew, and Syriac Maqama”, in Ayelet Oettinger and Danny Bar-Maoz (eds.), *Mittuv Yosef: Yosef Tobi Jubilee Volume*, Haifa: Haifa University Press, 2011, vol. 1, pp. 276–298

Wout van Bekkum and Naoya Katsumata, “Importance of Saadia Gaon’s Poetry to the Construction of a Dictionary of Early Medieval Piyyut: Example of *Essa Meshal*”, *Journal of Semitic Studies* (Oxford University Press), Volume 56, Number 1, 2011, pp. 145–165

Joseph Yahalom and Naoya Katsumata, *Tahkemoni, or the Tales of Heman the Ezrahite by Judah Alharizi*, Jerusalem: Ben-Zvi Institute, 2010, 686 + lv pp., illustrations.

Naoya Katsumata, *Seder Avodah for the Day of Atonement by Shelomoh Suleiman al-Sinjari* (Texts and Studies in Medieval and Early Modern Judaism 24), Tübingen: Mohr Siebeck, 2009, ix + 221 pp.

【受賞】

2008年6月 第1回京都大学湯川・朝永奨励賞（研究代表者）

2011年3月 第7回日本学術振興会賞（勝又悦子特定研究員）

ホームページ等

<http://judaism.jp/index.html>